

考妣ちちははのこと伝へむと紅葉燃ゆ

吾亦紅ひとり生く術身につけり

電子音ばかりの独居冬隣

百舌鳥鋭声聞こゆるもよき独居かな

幻聴の考^ふ妣^ぼのこゑする冬紅葉

考^ち妣^{ちは}のこゑ聞きたくて落葉掃く

冬の雨センサーライトに猫の影

家訓なる亥の日守りて炬燵出す

床の間にたつたひとりの年賀かな

雑煮椀一つで足りる今年かな

考妣ちちははの席にも置きぬ祝箸

ひとり居の鏡の我と初笑

初時雨片側のなき虹残る

行く末の分からぬままに冬の雨

鼠にはねずみの家族夜寒急

霜の夜や杖欲しくなり受話器取る